自己開示と友人のオープンナー特性が 印象評価及び関係満足度に及ぼす影響

○鎌田真緒¹・長谷川孝治²

(信州大学人文科学研究科¹・信州大学文学部²)

キーワード: 自己開示, オープナー, 印象

The influence of self-disclosure and friend's opener
on impression of partner and friendship satisfaction

Mao KAMATA¹ and Koji HASEGAWA²

(¹Graduate School of Arts, Shinshu University, ²Faculty of Arts, Shinshu University.)

Key Words: self-disclosure, opener, impression

問 題

Jourard (1971)は、自己開示を「個人的な情報を他者に知らせる行為」と定義した。日常生活における自己開示は、開示者のストレス発散や良好な友人関係を築くためなどに行われているため、開示者の精神的健康を左右する鍵であると考えられる。高開示者は、低開示者よりもストレス発散や良好な友人関係を築こうとしているため、精神的に健康であると考えられる。しかし、自己開示は、そのような開示者にとって良い側面を持つだけではなく、心理的抵抗をとまなうものであるという否定的な側面もある。

オープンナーとは、他者から自己開示を引き出しやすい人のことである。心理的抵抗を感じさせずに、開示をうまく引き出すことのできるオープンナーは、開示者にとって重要な役割を持っているといえる。先行研究では、オープンナー特性が高い人は、開示者のメンタルヘルスを良好にし、開示者から好かれることが示されている(越, 2009; Miller, 1983)。では、相手のオープンナー特性が低い場合、開示者にどのような影響を与えるのか。本研究では、この問題について、自己開示量に焦点を当てた検討を行う。自己開示をしたいという開示欲求は、開示量との間に正の相関がある(和田, 1995)。高開示者は開示欲求も高いといえる。相手のオープンナー特性が低い場合、高開示者は、開示したいけれどしづらいという認知的不協和に陥っている可能性がある。その場合、高開示者は相手の印象を悪化させたり、関係に不満を抱いたりする可能性がある。本研究では、友人とのペアを対象としたパネル調査を行い、これらの問題について、検討する。

方 法

[調査時期と調査参加者] 2012年4月(Time 1: 以下、T1)と7月(Time 2: 以下、T2)のパネル調査。大学に入学してから親しくなった同性の友人 92 ペア(男性 96 名、女性 88 名)。(分析に用いた尺度) 1) 自己開示: 自己開示尺度(坂本, 2007)を使用(11項目、5件法)。パートナーと知り合ってから今までの間に、各話題について「あなた自身がどう感じ、どのように考えるのか」ということを、パートナーにどの程度話してきたかを評定させた。2) オープナー: 小口(1989)のオープンナー尺度(10項目、5件法)を使用。分析には、ペアの得点を入れ替えて、パートナーのオープンナー特性として用いた。3) パートナーに対する印象評価: 対人認知に関する形容詞対尺度(井上・小林, 1985)を用いて、パートナーに対する参加者の印象を測定した(20項目、7件法)。因子分析の結果、個人的親しみやすさ、活動性、社会的望ましさの3因子が抽出された。4) 関係満足度: 浦・高野(1995)及び中村・浦(2000)の中から項目を選び用いた(14項目、5件法)。因子分析の結果、関係満足と関係不満の2因子が抽出された。

結 果

仮説を検討するために、T1の印象を共変量とした、自己開示(高・低)×オープンナー(高・低)の2要因共分散分析をおこなった。T2の印象評価の下位因子(個人的親しみやすさ、活動性)と印象全体の得点を従属変数にした分析において、交互作用が有意または有意傾向であった($F(1,172)=6.80, p<.05$; $F(1,176)=6.80, p<.10$; $F(1,175)=3.48, p<.10$)。下位検定の結果、相手がオープンナー低群において、自己開示高群は自己開示低群よりも相手の印象が悪化していた(図1)。

また、T2の関係満足度の関係満足度を従属変数として分析したところ、交互作用が有意傾向であった($F(1,178)=2.92, p<.10$)。下位検定の結果、相手がオープンナー低群において、自己開示高群は低群よりも関係に満足していなかった。

** $p<.01$

考 察

分析の結果、オープンナー特性が低い人と友人としてペアを組んでいる高開示者は低開示者よりも相手の印象を下げ、関係に満足できなくなるということが示された。このことは、問題でもふれたように、高開示者が認知的不協和に陥っていた可能性がある。高開示者は、開示欲求が高いため、開示しづらい相手には、開示したくても開示できないという葛藤が生まれ、この葛藤を解消するために相手の印象を下げ、相手との関係に満足していないと考えようになったということを示唆している。開示量の多い人は相手のオープンナー特性が低い場合、開示量の少ない人よりもパートナーの印象が悪くなり、パートナーとの関係に満足していないといえる。

自己開示は、高開示者は精神的健康であるという前提のもとで多くの研究がおこなわれてきたが、今回の研究では開示量が多い人のほうが、パートナーに対する印象と関係満足度がネガティブになっていた。開示量の多い人たちは、今回ペアになった以外の友人に対して、開示欲求を満たしているのか検討する必要がある。